

物語の可能性：James Hogg著 *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*の構造と時間を考える

The Impact of Narrative Structure on the Temporal Flow of James Hogg's
The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner

甲野恵子
KONO Keiko

[要旨] James Hogg (1770-1835) は、スコットランドはスコティッシュ=ボーダーズの小村エトリックで、羊飼いで小作農の家に生まれ、自身も羊飼いを生業とした作家である。父親が事業に失敗して、ほとんど学校に行くことは出来なかったが、独学を続けて、詩を書き、その才能をWalter Scott (1771-1832) に見出されて世に出た。またバラッドを採集して集成する。

この*The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* (1824) は、発売当初はそれなりの評価をされたようであるが、その後長らく忘れられていた幻の書物とも言えるような作品である。しかし、近年急速に評価を高めて来ている。カルヴィニズムの嵐の吹き荒れ始めたスコットランドが舞台で、予定説に支配される不幸な若者の手記を中心に展開する。ゴシック小説に分類されるような、兄弟殺しあり、ドッベルゲンガーあり、悪魔ありの虚実交ぜの物語であるが、その内容もさることながら、構造の複雑さ、巧みな時間の扱い方など、現代の小説としても先端をゆくようなめくるめく世界が展開される。そのような世界の語られ方を作者、語り手、編者の側面から考えてみたい。

[キーワード] James Hogg、作者、語り手、編者

[Abstract] James Hogg (1770-1835), the author of the novel *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* (1824), is known as “Etrick Shepherd”, because he was the son of a tenant farmer, and farmed throughout his life. Although his father’s bankruptcy meant that he lacked formal education except a few months of schooling, he largely taught himself to read and write, and won a local reputation for his songs and poems which were rooted in local folklore. This background makes the novel lively.

The structure of the novel is rather complicated. It consists of three parts: the Editor’s Narrative, the Memoirs and Confessions of a Justified Sinner, and again the Editor’s Narrative. Three stories are told from these standpoints, and the passage of time is stratified, and tangled. The drama unfolds in Scotland which, at the beginning of the eighteenth century, experienced a wave of Calvinism. Many terrible and supernatural things are related in the story, such as parricide, the murder of a priest, and the appearance of the devil.

It seems that the most interesting and important point of the novel is the elaborate way in which the narrative is sustained and the impact it has on the flow of time. This paper investigates and explores this point.

[Key Words] James Hogg, author, narrator, editor

1. はじめに

James Hogg (1770-1835) の *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* は1824年7月にロンドンのロングマン社から出版されている。匿名で出版され、発売直後にはある程度の売れ行きがあったらしいが、そこそこの書評とともに、いつの間にか歴史の埃の中に埋もれてしまったらしい。ところがいつの間にか復権し、2010年に出版されたOxford World's Classics新版では、Ian DuncanがIntroductionで次のように述べるほどに評価されてきている。

After a century of neglect following its first appearance . . . [this novel] is more alive today than it has ever been. . . A strong force in the novel's resurgence has been its influence on contemporary fiction, especially in Scotland, where it was written. (ix)

100年どころではない黙殺にもかかわらずこの作品が細々とながら命脈を保ち、後続のスコットランド文学に影響まで与えるようになったという見直しのきっかけは、1947年にフランス人作家のAndré Gide (1869-1951) が、知人から送られた本書に熱烈に反応し、1948年に雑誌に翻訳版が掲載された際に作品を高く評価する序文を書いたという、そのあたりかららしい（これらの事情は高橋『エトリックの羊飼』に詳しい）。そして時は21世紀を迎えて、このように新しいIntroductionを付した新版が出ているのである。

これがどのような作品であるかについてDuncanはそのIntroductionの中で、Hogg自身の評言も引いて次のように述べている。

Hogg himself called *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* 'a story replete with horror', so much so that 'after I had written it I durst not venture to put my name to it'. Modern criticism has tended to classify it as a 'Gothic novel', meaning (in the loose sense of the term) a period novel of terror and the supernatural. But the label does not fit very well. (xvii-xviii)

たしかにおぞましい世界が展開されてはいるのだが、扱われている事象やその描写がどれほど衝撃的で、超自然的で、不気味で、神憑っていても、21世紀の読者は、Gothic novelとしてのこの作品ではなく、世界の語られ方に惹きつけられるのではないだろうか。作品を丁寧に読むことで何が見えて来るだろうか、それを探って行きたい。

2. 作品の構造

われわれがこの作品を手にとるとしても、上のような経緯から、ことさらにRoland Barthesを意識することなく「作者の死」という環境の中で、つまり作者という文脈なしで作品を読むことになる筈であるのだが、第三部で作者自身が突然登場して来るので、否応なくあらためて作者の存在を意識することになる。その必然を考える意味でも、どのように展開され、語られていくのかを見ていくことにしたい。

作品は三部に分かれており、第一部が“The Editor's Narrative”、第二部が“Private Memoirs

and Confessions of a Sinner Written by Himself”、そして第三部が“The Editor’s Narrative”となっているから、作品全体のタイトルは第二部からとられていることが分かる。三部に分かれていると言っても、第三部は短いこともあってか、第二部の後日談とでも言うべき扱いで、タイトル名もなければ、改ページすらされていない。この拙論で拠り所としたOxford World’s Classics版では、目次に、掲載ページとともに章題が記されているし、柱にも“The Editor’s Narrative”とあるが、本文の中に章題はない。Everyman’s Library版では、Confessionの終わったところに3センチほどの長さの線が1本引かれていて、要するに全体は二部構成となる扱いである。しかし第三部は、次元的に流れが変わるし、その一方で第一部と第二部を繋いでもいて、たいへん重要な部分であるのだ。

第一部と第二部ではどちらも、それぞれの語り手が、「現在」から過去を振り返って語るかたちになっている。

第一部で「編者」を名乗る語り手が語り始める「現在」は、多分1823年あたりだろう。彼は、スコットランドのグラスゴー近郊らしい架空の土地の、ある一族の来歴を数行にまとめて示した後、次のように語る。

I find, that in the year 1687, George Colwan succeeded his uncle of the same name, in the lands of Dalchastel and Balgrennan; and this being all I can gather of the family from history, to tradition I must appeal for the remainder of the motley adventures of the house. . . I am certain, that in recording the hideous events which follow, I am only relating to the greater part of the inhabitants of at least four counties of Scotland, matters of which they were before perfectly well informed. (5)

このように一人称で述べてから、いよいよ話を始める。話が始まってしまえば100年以上も昔のことを語るのだから語り手は当然、物語世界の外にいることになる。内容を検証しながら伝聞形で語るという手法でなかったら一人称の語りということはいえぬ。いわば全知の語り手による三人称の物語になる。そのような語り手がどうして「編者」を名乗るのか。OEDによると“editor”とは、“One who prepares the literary work of another person, or number of persons for publication, by selecting, revising, and arranging the material; also, one who prepares an edition of any literary work”ということであり、つまりeditorとは本来、語り手にはなれない立場である。Everyman’s Library版のIntroductionには、“It was in the spirit of Romanticism for its authors to pretend they were merely editors”(viii) という記述があるけれども、それだけのことではないだろう。語り手がここで「編者」を名乗ることが出来るのは、作者によって、第二部と第三部が用意されているからである。第一部は、第二部となる手記を謂わば、説明する役割を持つ。第二部に対する証言と言ってもよい。ところがこれが、芥川龍之介の『藪の中』と同様に、照らし合う鏡の上には、およそ違ったものが像を結んでいる。

物語の舞台は、カルヴィニズムが浸透し始めてはいても、まだ活気も華やかさもあつた時代のスコットランド。世俗的なことにしか興味のない分限者の領主George Colwanがよりにもよって、異常なほど宗教改革の信念に凝り固まった、グラスゴーの名士の娘Rabina Ordeを妻に迎える。

どんちゃん騒ぎの結婚式の、ほとんどその夜から二人は背を向け合うことになり、邸の上の階と下の階に、出入り口まで別々に暮すことになる。領主はさっさと、それまでの愛人Miss Loganを家に入れて奥様の代わりにしてしまう。

それでもGeorgeとRabinaの間には二人の息子が誕生する。長男は、父親と同じ名前を与えられ、その愛情を一身に受けて成長していく。一方次男のRobertは、法律上はGeorgeの弟であったが、父親のGeorge Colwanは（そして多分読者も）そうは思っていない。妻が頼りにもし、その彼女の話し相手として度々彼女のもとを訪れるWringham牧師の子であると疑う証拠はいくらかもある。養育費だけは出すけれども、洗礼の時に名前もつけてやらない。結局、牧師のほうが、RobertにWringhamの名前をつけてその母親と一緒に自分のもとに引き取り、以後兄弟は別々に育つことになる。語り手は兄弟のそれぞれを次のように描写する。

He [George] was a generous and kind-hearted youth; always ready to oblige, and hardly ever dissatisfied with any body. Robert was brought up with Mr. Wringham . . . and there the boy was early inured to all the sternness and severity of his pastor's arbitrary and unyielding creed. He was taught to pray twice every day, and seven times on Sabbath days; but he was only to pray for the elect, and, like David of old, doom all that were aliens from God to destruction. (17)

語り手がGeorgeの側に立っているのは明らかで、読者はこの段階ですでに、Robertに反感を持つようになる。またRobertは、牧師と母親の二人から、父と兄の悪口を散々聞かされて育った結果、二人に対して異常なほどの憎悪の感情を抱く。

成長した二人は、やがてエディンバラで偶然に相見えるが、それがGeorgeの苦難の始まりとなる。エディンバラで楽し気にテニスに興じ、巧みなプレイで人々の賞讃の対象となっているのが自分の兄であることに気がついたRobertは、兄の傍らにへばりつき、罵倒のこぼれを浴びせかけ続ける。その日から彼は、兄につきまとい、邪魔をし、いらだたせ、手を出し、足で蹴り上げ、試合を妨害した。温和なGeorgeがたまりかねて、手加減しながらもラケットで叩くと、敵は口と鼻から血をあふれさせ、それを拭おうともしないで立ち向かってくるのだった。このおぞましさを語り手は別のところで次のように描写する。“His nose . . . again gushed out blood, a system of defence which seemed as natural to him as that resorted to by the race of stinkards” (35) と。いわば犬畜生と同列に扱うほど、語り手もRobertを嫌っているようである。一方、Georgeに関しては、彼の視点で、自由間接話法によって語られるところもある。Georgeの人柄をそこはかとなく伝える次のような箇所はどうだろう。

He was still involved in a blue haze, like a dense smoke, but yet in the midst of it the respiration was the most refreshing and delicious. The grass and the flowers were laden with dew; and, on taking off his hat to wipe his forehead, he perceived that the black glossy fur of which his chaperon was wrought, was all covered with a tissue of the most delicate silver—a fairy web, composed of little spheres, so minute that no eye could discern any one of them; yet there they were shining in lovely millions. Afraid of defacing so beautiful and so delicate a garnish, he replaced his hat with the

greatest caution, and went on his way light of heart. (32-33)

この引用は語り手が、陰惨な物語の中で、読者に一息吐かせるのも仕事のうちと心得ているらしいことを思わせるが、一方これがこれから先のGeorgeの運命の厳しさを際立たせもするのである。

自分の行く先行く先に現れて嫌がらせをするRobertに対してGeorgeは、Robertがどうして自分の行き先を察知して付き纏うのか、時には自分自身がその場の思いつきで出向くようなところにも出現することを不審に思い、問い質す。Robertは“I was told so by a friend”と答え、“Who was that friend?” “How does he know me?”と畳み掛ける兄に、“I cannot tell”とだけ答えるが、その秘密はこの段階では読者には明かされない。

Robertの嫌がらせは度を増し、二人の関係は一層悪化する。裁判沙汰になってGeorgeが勝利し、祝いの宴が設けられたその翌朝、Georgeは死体となって発見される。領主の父親も愛息の死を悲しむあまりほどなくして亡くなってしまい、Colwanの家督はRobertが継ぐことになる。Georgeの人柄を愛していた領主の愛人のMrs Logan（そう呼ばれるようになっている）が、犯人がRobertであることをつきとめて当局に告発し、当局は逮捕に踏み切るが、彼は失踪し、その行方は杳として知れない、というところで第一部は終る。

終わったところで、語り手は編者に戻り、次のように第二部の“Private Memoirs and Confessions of a Sinner”の予告をするのである。

I have now the pleasure of presenting my readers with an original document of a most singular nature, and preserved for their perusal in a still more singular manner. I offer no remarks on it, and make as few additions to it, leaving every one to judge for himself. We have heard much of the rage of fanaticism in former days, but nothing to this. (71)

手記だけ読んでも分かりにくいだろうから予め背景をお話ししておきましょう、というところだろう。この第一部は、語り手が19世紀はじめの「現在」に居て、17世紀も残り少なくなってきたあたりまで遡って顛末を語り、第二部の手記に引き継ぐことになる。

第二部での語り手は、作品の題名となっている“justified sinner”つまりRobertである。17世紀の終りから18世紀にかけてが「現在」となる。キリスト教で“justified”と言えば、別にカルヴィニズムに限らず、「神によって義とされる」ことを言い、「義」とはつまり「神の前の正しさ」ということであるが、カルヴィニズムにあっては、それが予め決められているという予定説となる。Colwanの下の子Robertを引き取ったのが、このカルヴィニズムを厳しく信奉する牧師Wringhimであったことは、第一部で説明されている。

その第一部が、Georgeの視点を通して語られることも多かったのに対して、これはRobertの手記であるから、視点は一貫している。養父である牧師に予定説を叩き込まれ、実の父や兄を憎むことしか知らないで育った男が、自分の身の破滅の近いことを予想した時にまとめた回想録である。語り手は当然、物語世界の内側、それもその中心に居て、専ら自分自身について語っている。F. Scott Fitzgeraldの*The Great Gatsby*で語り手のCarrawayがGatsbyの傍らに居て、その人生をなぞっているのと違って、いくらGeorgeを目の敵にしているとしても、語るのは飽くまでも自

分のことである。また語り手自らが主人公であっても、Earnest Hemingwayの*A Farewell to Arms*のように、ただ回想しているのではなく、回想を文書にまとめ、しかもそのほとんどの部分が印刷までされている設定であること（これについては第三部で明らかにされる）は、語りの形式としてはきわめて稀ではないだろうか。

Robertには、苦勞もせずに回想録を書き上げるだけの読み書き能力があった、どころか、たいへんに優秀であったと言ふべきだろう。人望、男氣、風采、育ちの良さといたものでは、はるかに弟を凌いでいた兄もそれだけは適わなかったのがRobertのこの学力だった。ところがその彼が、どうしても太刀打ち出来ない生徒がクラスにおり、その状況が我慢ならないRobertが、手を尽くして相手の少年を陥れ、濡れ衣を着せ、ついに相手が放校処分を受けるに至るところまで追い込む挿話が回想されるが、そここのところを語り手は次のように記すのである。“His guilt was manifest, and he was again flogged most nobly, and dismissed the school for ever in disgrace, as a most incorrigible vagabond. This was a great victory gained, and I rejoiced and exulted exceedingly in it” (85). これは作者が素知らぬ顔で読者に、Robertに対する反感を煽っているところだが、Robertはまた、次のようにも述べている。“I remember of nothing farther in these early days, in the least worthy of being recorded. That I was a great, a transcendent sinner, I confess. But still I had hopes of forgiveness, because I never sinned from principle” (86). 作者は、一方的に語り手のRobertに発言させているだけで、この顛末を第三者や相手がどう見ているか、ということを彼に述べさせてはいない。彼の発言は、かなり自分に都合の好いものに違いない筈だが、それにもかかわらず読者が反撥を募らせるのは必至だろう。読者がすでに「編者」の記録を読んでしまっているからであり、そこには、謂わば第三者としての眼差しと、時にGeorgeの視点があるからである。しかしそれだけではない、Robertの自己正当化は、養父に吹き込まれた予定説と異常な育ち方に裏打ちされて、それだけでも充分滑稽で哀れなほど倫理にもとって、読者の反感を呼ぶ。彼はあっけらかんと、しかしいささか偽悪的に“I was particularly prone to lying, and I cannot but admire the mercy that has freely forgiven me all these juvenile sins” (83) と言ったりもするのだ。Robertにとってlieあるいはto lieということばには、ほとんどニュートラルなニュアンスしかないのかもしれない、と思われてくる。

また、養父の下男John BarnetはRobertの悪しき性格を見抜いていて、事あるごとに詰る。例えば以下の箇所である。

He discovered some notorious lies that I had framed, and taxed me with them in such a manner that I could in nowise get off. . . [H]e. . . exulted over me most unmercifully, telling me I was a selfish and conceited blackguard, who made great pretences towards religious devotion to cloak a disposition tainted with deceit, and that it would not much astonish him if I brought myself to the gallows. (77-78)

とあって、自分で“notorious lies that I had framed”と言っていれば世話はないが、振り返って「今」の時点で、語り手に敢えてそれを書かせている作者には、語り手に多少の罪の意識がないわけではないことを、こうすることで暗に告げているのかもしれない。いずれにしてもこの下男は、RobertがWringhim牧師の養子ではなく実子だろう、と暗にほのめかした挙句、“You made

to honour and me to dishonour! Dirty bow-kail thing that thou be'st!” (78) と悪態をつき、Robertの言いつけ口を聞いた牧師はそれでも、息子を諫め、下男と話しをしに出掛ける。博学で敬虔な牧師様と、無学ながら彼に対して一向に臆することのない善良なJohnの遣り取りをRobertは盗み聞きしている。Johnは首を宣告され、牧師館の鍵を牧師の足許に投げつけて、その日のうちにさっさと牧師館から出て行く。当然Robertは有頂天だが、ことによるとこのJohnの行動は、異常な価値観の渦巻くこの第二部の手記の中で、読者にとって唯一胸のつかえが下りる挿話かもしれない。ごく真っ当なJohnという人物が登場し、しかも彼がお国訛りを遣うことで、リアリティが生まれ、この手記がただの悪夢のゴシック物語ではないことが認識される。

しかしこのあと語り手のRobertは、躊躇いながらも次第に悪夢のような背徳的な行為に手を染めて行くようになり、手記の中に自分のその様子を逐一報告し、言い訳をしながら正当化する。

そしてここで、第一部の謎が種明かしされる。兄のGeorgeの行動——それは時に、彼自身が予定も予測もしていないこともあった——が、逐一Robertにわかってしまうのはなぜか、という謎に対する答えは、RobertとGill-Martinとの出会いにあった。Gill-Martinというこの謎の登場人物は、誰かと向き合っていると、次第に相手そっくりになり、相手の考えていることまで分かる能力を持っているという。向かい合っている人間ばかりではなく、その気になれば誰でもあれ狙いをつけた人間になることさえ出来た。現実にはありえないわけで、解けた謎が別の謎となるのである。

RobertがGill-Martinに出合ったのは、奇しくもRobertが養父から、自分が“justified person”として神に受け入れられたことを告げられた日のことであった。テキストには次のように記されている。“It was on the 25th day of March 1704, when I had just entered the eighteenth year of my age” (91). 自分なりに信仰を守って来たつもりRobertは “to be assured of my freedom from all sin, and of the impossibility of my ever again falling away from my new state” (88) と、すべての罪から自由になる、つまり自分は罪を犯す心配がないと保証されて、嬉し泣きする。彼が高揚した気分で山道を歩いている時に出会ったのがGill-Martinであった。その謎めいた様子を警戒していたRobertがしかし、その日以来次第に心を許すにつれて、相手は彼を支配するようになり、Robertも彼のことを“illustrious friend”と手記に書くようになり (Czar Peter of Russia travelling through in Europe in disguiseと勝手に思い込む始末である!)、ついには完全な主従関係になる。第一部で、エディンバラ以降、Robertが兄に付き纏ったのも、Georgeを苛む数々の理不尽な出来ごとも、すべてGill-MartinがRobertを裏で唆していたのである。もっとも、George自身にさえ分かっていないGeorgeの意思を見通してRobertを送り込んで指示していたのがGill-Martinであった、と分かったからと言って、読者が納得出来るわけではない。人間という存在の二面性の象徴という解釈も可能だろうがしかし、むしろその荒唐無稽な展開こそが読者の求めていたものだったのではないか。この作品が世に出た1824年当時の受容状況 (そのあたりのことも高橋『エトリックの羊飼』に詳しい) はともかく、20世紀以降急速に評価が高まっているのも、決して割り切れてしまわない、不条理とも言えるところにもあるのではないか。高橋は、「(ギルマーティンの融通無碍な活動を許容することになる) こうした読み方は、(中略) 現代の読者の喜び方がこのテキストの出版当時の読者とはずいぶんと違うものになってしまったこと

を物語っている」(30)と指摘している。また、ドイツの劇作家で詩人のJohann Wolfgang von Goethe (1749-1832)がヨーロッパに広く流布する伝説に材を求めた作品*Faust* (Part I, 1808; Part II, 1832)には悪魔のMephistophelesが登場して主人公Faustを翻弄するが、この作品は今日に至るまで高い評価を保ち、荒唐無稽だとして排斥されることはない。Hoggが*Faust*を読んでいた可能性についてDuncanはIntroductionの中で指摘しているが、それについては後述する。

解釈の例を挙げれば、ジョルジュ・バタイユ (1897-1962)は「怪物じみた小説」(『ことばとエロス』所収)と題したエッセイで、この第二部に焦点を絞って論じているが、彼はGill-Martinをあっさりと分身と呼んでいる。作品全体に対する彼の評価については、後ほどあらためて述べたい。

実は手記の中にも、Robertが「分身」に悩まされる箇所がある。エディンバラの一連の出来事のあと、彼は奇妙な病気で家に閉じこもることになる。

I generally conceived myself to be two people. When I lay in bed, I deemed there were two of us in it; when I sat up, I always beheld another person, and always in the same position. . . : this my second self was sure to be present in his place.

.....

The most perverse part of it was, that I rarely conceived *myself* to be any of the two persons. I thought for the most part that my companion was one of them, and my brother the other; and I found, that to be obliged to speak and answer in the character of another man, was a most awkward business at the long run. (116)

この引用の後半、自分ではない二人に分かれて仕舞うという分身の仕方だと、自分の意識はどちらにあるのだろうか、という問題も「分身」について考察する時に重要になってくるだろうが、此処でより問題になるのは、Gill-MartinをRobertの「分身」と解釈するかどうかだろう。だが解釈としては、「分身」と同じくらい科学的には受け入れ難いが、*Faust*のように「悪魔」とするほうがあっているかもしれないとも考えられて、それこそ、それぞれの読者が解釈すればよいことであるし、もっと言ってしまえば、解釈などすることなしに、そのまま読めばよいとも言える。此処で問題にしたいのは、どこまでも物語の語られ方である。

Gill-Martinに唆されたRobertはその後、兄殺し、聖職者殺し、と罪を重ね、また身に覚えのない殺人でも咎められるのだが、それはGill-Martinの仕業かもしれない。結局、兄が亡くなって継いだ家督を棒に振って、彼はGill-Martinから逃れる旅に出る。ほとんど一文無しで各地を輾転とするが、敵から逃れることは出来ない。それでも、ほとんど顔を知られていないエディンバラに向かい、ウェスト・ポートにたどり着くと、偶然、印刷所に職を見つけることが出来た。しばし安らぎを得られた彼は、そこで手記の執筆を思いつくのである。植字にも慣れ、自分の手記の印刷を許されたところで、ついに印刷所に悪魔があらわれる。好奇心からRobertの手記の一部を読んだ印刷所長のMr. Watson (実在の人物らしい)が内容に腹を立て、燃やしてしまう。おまけに悪魔のひとりがRobertの消息を尋ねたらしい。焼却を免れた1部を懐に、彼はふたたび逃げ出さざるをえない。それが1712年7月27日。以後の手記に彼は日付を入れる。1712年9月18日、彼は次のように書く。“Still am I living, though liker to a vision than a human being; but

this is my last day of mortal existence” (178). 彼は、“my devoted friend”と共に死ぬことを決意するのである。手記の最後はこう結ばれる。“Amen, for ever! I will now seal up my little book, and conceal it; and cursed be he who trieth to alter or amend!” (178) Penguin版の後註でthe Book of Revelation (22:18-19) と対比させているが、黙示録は“If any man shall add unto these things, God shall add unto him the plagues that are written in this book”と言っているから、大袈裟で取って付けたようでありながら、いかにもこの手記の最後にふさわしい。

第三部では編者が冒頭で、“What can this work be?”と、手記について自問自答してみせてから、次のように、この第三部の内容を予告する。

Attend to the sequel: which is a thing so extraordinary, so unprecedented, and so far out of the common course of human events, that if there were not hundreds of living witnesses to attest the truth of it, I would not bid any rational being believe it. (178-9)

編者はすでに、読者に手記を読ませたし、それに先立って手記の背景も話したが、その手記がどうして手に入ったかはまだ説明していない。編者は第一部の終りでも、“I have now the pleasure of presenting my readers with an original document of a most singular nature, and preserved for their perusal in a still more singular manner” (71) と思わせぶりに宣告しているから、それがやっと此処で明かされることになる。第二部から改ページもなく続くこのセクションで目覚ましいのは、第一部で物語世界の外側に居た「編者」を名乗る語り手が、物語世界の内側に居て、「編者」という職能のもとに、全知の語り手ではなく、登場人物の一人として語っていることである。その上、物語内の語り手となった編者が、このあと述べるように、物語の内側にもぐり込んで来た作者と向き合うという稀な展開を見せる。

時間はふたたび1823年あたり。第一部で「編者」が語りを展開している「現在」が時間の流れとしてここに続いている。一方、編者が語る内容、つまり、よく知られている筈の言い伝えの出来ごとからは、百年が経っている。またそれに呼応するかたちの手記の舞台になった第二部からも当然、百年ほどを経ている。この「編者」はスコットランドに実在した*Blackwood's Edinburgh Magazine*⁽¹⁾の編集者ということらしい。編者は、その雑誌の1823年8月号に掲載されたJames Hoggからの“authentic letter”を公開する（Oxford版の註に、“Hogg reprints his own letter” (n211) とある）。それは、ある自殺者の墓についての話で、次のような次第である。百年も前のその自殺者の雇い主や牧童の末裔の話を総合すると、死ぬ直前に彼は二人で干し草の山の周りでせわし気に動いており、牧童がそばに行った時には、古い干し草をロープにして首を吊って、ひとり死んでいたという。その時から百年も経ったこの夏、二人の青年が思いつきでその墓を暴いたところ、遺骸は百年前とまったく変わらぬ姿をとどめていた、遺骸を調べてみると彼は金に困っていたようで、それに絶望して自殺という道に外れたことをしたのだろう、というのがHoggの手紙のあらましである。

好奇心に駆られたその編者はHoggを尋ね当て、自分をそこへ連れて行ってほしいと頼むが、生業の羊飼いに戻っている彼は、投書の内容については“it was a queer fancy for a woo-stapler to tak” (183) とお国訛りで答えて取り合わない。編者は結局、別の人に案内されて墓を掘り返し、

遺体のそばで、tabacco spleuchanに入った*printed pamphlet*を見つけるのである。標題ページには次のように書かれていた。“THE PRIVATE MEMOIRS/ AND CONFESSIONS/ OF A JUSTIFIED SINNER: /WRITTEN BY HIMSELF. / FIDELI CERTA MERCES⁽²⁾” (188).

そして、この標題に続く第二部の手記が始まるのである。その自殺者についてHoggは第三部の雑誌宛ての手紙の中で、“The little traditionary history that remains of this unfortunate youth, is altogether a singular one” (179) と説明を始めて、不可解な自殺をした時の様子の伝聞を綴り、“Thus far went tradition, and no one ever disputed one jot of the disgusting oral tale” (181) と片付けている。何分、百年以上も昔のことである。干し草の山の周りで二人の人影を見たという牧童の証言が残っているのは些かりアリティを欠くが、辻褄は合う。読者はRobertが手記の最後の日に“I pledged myself to my devoted friend, that on this day we should die together. . . [T]here is some miserable comfort in the idea that my tormentor shall fall with me” (178) と書いているのを知っているから。

最後に、編者はこの期に及んで、“With regard to the work itself, I dare not venture a judgment, for I do not understand it” (188) と言ってから、次のように自分の立場を表明する。

Were the relation at all consistent with reason, it corresponds so minutely with traditionary facts, that it could scarcely have missed to have been received as authentic; but in this day, and with the present generation, it will not go down, that a man should be daily tempted by the devil, in the semblance of a fellow-creature; and at length lured to self-destruction, in the hopes that this same fiend and tormentor was to suffer and fall along with him. (189 下線は引用者)

編者は、第一部の冒頭から、“It appears from tradition. . .” (5) と物語を始めており、伝説・伝承とは不可分の立場にあることが読者には分かっている。それでいて、今日の世の唯物的な趨勢の側に自分を置いて手記を貶める。そして、だめ押しのように述べるのだ。

In short, we must either conceive him not only the greatest fool, but the greatest wretch, on whom was ever stamped the form of humanity; or, that he was a religious maniac, who wrote and wrote about a deluded creature, till he arrived at that height of madness, that he believed himself the very object whom he had been all along describing. (189)

これは、語り手の韜晦というべきだろう。編者に、自分が雑誌に送った手紙のことを “It was a queer fancy for a woo-stapler to tak” と答えて墓の掘り返しに同行することを拒絶したHoggと編者がここで重なる。

3. 物語を流れる時間

物語は第一部で、19世紀初頭の「現在」から17世紀と18世紀を跨ぐ30年ほどのあたりを振り返り、第二部は、そこに身を置いていた男の手記であり、第三部はふたたび「現在」となって、そこではその「現在」に身を置く登場人物たちの行動が、百年前の時間と緋い交ぜになりながらも

時間軸に沿って語られる。従って、第三部は上で述べた通り、時間的には第一部と繋がり、内容的には第二部の後日談となるので、謎を含んで平行するふたつの物語に作者が出した筈であると考えられる。

編者は第一部冒頭のパラグラフで、“I am certain, that in recording the hideous events which follow, I am only relating to the greater part of the inhabitants of at least four counties of Scotland, matters of which they were before perfectly well informed” (5) と、一応編者らしい挨拶をするけれども、あとは全知の話者に徹して時代を下って行き、第二部は別の話者による回想なので、回想している「現在」から戻りはするが、第一部と平行する時代が語られ、ふたつが一緒になって第三部に流れ込む。つまりこの物語では、時間は基本的に縦に流れるだけで、ジェラルド・ジュネットのいう錯時法⁽³⁾(anachronie)が使われていないように見える。編者とは、錯時法を効果的に使う仕掛けとして登場させられることが多いから、第一部を読んでいると、それが「編者」の語りである必然が感じられなくて、落ち着かない筈だ。それだけに、第三部になって、「現在」に生きる「編者」が*Blackwood's Magazine*の編集者で、実際に墓掘りに乗り出すとなれば、時間と時間、フィクションとノンフィクションのあわいが溶けてしまって、読者はめまいを起こしそうになる。

ただ第一部で編者が語るのは、手記の発見が前提となればこそ、であることに気がつく、物語の時間は垂直ではなく、循環することになる。

4. 誰が物語を書いたのか

はじめに述べたように本書は、最初は匿名で出版された。高橋は『エトリックの羊飼い』で次のように出版当時の著者を取り巻く状況を、掲載誌『ブラックウッズ』の根拠を示しながら述べている。

初版は匿名で出版されたとはいえ、作者がだれであるかについての正しい推量もしくは情報の漏洩は、このテキストに引用源としてのホッグの手紙を提供した『ブラックウッズ』の誌面で、きわめて早くから半ば公然と行われていた気配があり、そこでは作品最後に登場する羊飼いのホッグが作者として仄めかされているために、一層作者への関心が強く呼び起こされる。(31-32)

たしかに、読み終わってみると、現代の読者は逆に、作者はJames Hoggなのだろうか、と疑わしい思いにとらわれる。DuncanがIntroductionであっさり、“The editor is a graduate of Glasgow University, one of the centres of the Scottish Enlightenment” (x) と述べているし、第三部の Editor's Narrativeには次のような一節があるのだ。

I took [the] opportunity to pay a visit to my townsman and fellow collegian, Mr. L—t of C—d, advocate. I mentioned to him Hogg's letter, asking him if the statement was founded at all on truth. His answer was, “I suppose so. For my part I never doubted the thing, having been told that there has been a deal of talking about it up in the Forest for some time past. But, God knows! Hogg has imposed as ingenious lies on the

public ere now.” (182-83)

このMr. L—t of C—dは後註によれば、特定されている。“John Gibson Lockhart of Chiefwood, prominent Scottish man of letters, friend of Hogg, and son-in-law of Scott” (n212) ということ、*Blackwood's Magazine*のone of the chief contributorsであったそう。高橋によれば、「この記事の筆者として特定されているロックハートこそ、自殺者の墓の発掘に赴こうとする<編者>が「同郷人で大学の同窓生」(32) としてイニシャルで言及していた友人に他ならない」ということになる。高橋は作者が誰であるかについての関心の高さについて、次のように述べるのだ。

もちろんホッグに対するこの関心は、ホッグが羊飼いであるという事実ではなく、編者たちを誑かすレトリックを行使する人物として自己劇化しているという事実由来するに違いない。したがって関心の対象が編者を誑かす羊飼いのホッグなのか、読者を誑かすホッグという作者なのかすでに判然としなくなっている。(32)

Editor's NarrativeをLockhartが書いて、彼と同行者が手に入れた手記をJustified Sinnerが書いたのなら、作者である筈のJames Hoggが書いたのは雑誌宛ての手紙だけということになるではないか、と一瞬でも思ってしまう読者もいる筈で、少なくとも「読者を誑かすホッグという作者」であることは確かなようである。James Hoggという作者は読者を、(ついでに編者たちをも) 心ゆくまで思う存分振り回す。虚実緋い交ぜの話の運びは、「虚実」と言うよりは、「虚の中の虚と虚の中の実」が緋い交ぜになっている、と言うほうが正しい。

物語には、Barthesの主張する「作者は死んだ」という主張とは次元を異にする世界のあることを、この作品は誇示しているようだ。

5. 終りに

この作品の仕掛けの鮮やかさを確認するために作品を読んでは考えて来たが、物語とは、その語り方で、何処までも可能性が広がるものではないだろうか。James Hoggは作者をも誑かすようなところがある、と言っても言い過ぎではないかもしれない。ジョルジュ・バタイユは「ある意味でロバート・リングムが一教派の過剰を予防するための誇張でありカリカチュアであることは、否み得ない事実だろう。しかし、作品がそれに限定されるなら、わたしたちにとって歴史的な興味しかないことになる」(68) と言っているが、確かに、内容にのみ目を奪われては、ほんとうに読んだことにはならないだろう。彼はさらに次のようにHoggを称讃している。

小説のジャンルが涸渇するようになっている時代に、ジェームズ・ホッグの未知の傑作に、この上なく重大な関心を向けよう。それというのも、それは——^{フィクション}虚構の用途を描写に限定しているあれこれの作品の無能さと退屈さ—to^{フィクション}虚構にたよることを無限に正当化するものを内に孕んでいるからである。(68-69)

「虚構にたよる」とは、まさに「荒唐無稽を恐れぬ」ということであるように思われる。むしろそれこそが物語の醍醐味であり、それを正当化出来るだけの剛さをこの作品は持っている、とバタイユは言いたいのではないか。

Hoggに学ぶべきは、もちろんその形式の踏襲ではなく、物語のジャンルで縛られずに、しな

やかに果敢に試みる心意気だろう。

Hoggは十分に現代の同時代者としても通用するであろうほど斬新な一方、彼は色濃く染みついた伝統を感じさせる人でもあった。高橋は原著の訳書『悪の誘惑』に収められている「ホッグ論」の中で、次のように指摘している。

母マーガレットは国境地方に伝わるバラッドや口承説話に精通しており、(中略)長老派的信仰の持主であったと考えられる父親からは、聖書及びスコットランドの宗教事情に就ての様々の知識を息子たちは得ることが出来たようである。『悪の誘惑』を読んだ我々にとってはこうした背景が後の詩人にどれほど豊かな土壌を与えたか贅言を費やす必要はない。(279)

彼の新しさは単なる思いつきではなく、地に足を着けて、もぐり込むほど地を求めた結果であったのかもしれない。彼とファウスト伝説の関係についてもそのようなところが感じられる。Duncanは、その*Faust*とHoggの関係について、Introductionの中で次のように指摘している。

[S]everal incomplete English versions. . . were published in the early 1820s, including one possibly by Coleridge. It is likely that Hogg read the substantial extracts translated by John Anster that were printed in *Blackwood's Magazine* in June 1820. . . . Goethe's masterpiece revived British critical interest in Christopher Marlowe's *Tragical History of Dr Faustus*, excerpts from which (including the whole of the last scene) were also printed in *Blackwood's*, in an 1817 article by John Wilson. Hogg's devil Gil-Martin, has some affinities with Marlowe's and Goethe's, such as deadpan wit and dialectical skill. (xviii-xix)

思い上がった主人公が悪魔に鼻面を取って引き回される、という展開の枠組みは重なるが、Hoggがより強く影響を受けたのは、Goetheの*Faust*に刺戟されてふたたび日を見たMarloweの*Tragical History of Dr Faustus*のほうであったことは、*Justified Sinner*の手記の終わり方から判断出来る。前衛的であるとも言えるHoggの作品が、より古いファウストから影響を受けているのはHoggの好みだろう。Goetheの*Faust*が美しく自由な世界の幸福を予感しながら死んで行くのに対して、Marloweの*Dr Faustus*は悪魔によってずたずたに引き裂かれて死んでいるのを発見される。Goetheの救い(甘さといってもよいかもしれない)は、Hoggにはない。

註

- (1) *Blackwood's Edinburgh Magazine*は、英語版のWikipediaによれば1817年4月に創刊され、1980年まで続いた。“Important contributors”として、George EliotやJoseph Conrad、Samuel Taylor Coleridgeと並んで、James Hoggの名前も記されている。
- (2) FIDELI CERTA MERCESは“the reward is assured for the faithful” (188)
- (3) 錯時法についてジェラルド・ジュネットは『物語のディスコース』で、次のように説明している。「物語内容の順序と物語言説のそれとのさまざまな形式の不整合を、本書ではこのように名付けることにする」(30)

引用文献

- Duncan, Ian. Introduction. *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*. Oxford UP, 2010.
- Hogg, James. *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*. Oxford UP, 2010.

- Lewis, Roger. Introduction. *Confessions of a Justified Sinner*. New York, Everyman's Library, 1992.
- ジョルジュ・バタイユ「ジェイムズ・ホッグ『怪物じみた小説』』『言葉とエロス』山本功訳 東京：二見書房 1974.
- ジェラルド・ジュネット『物語のディスコース』花輪光ほか訳 東京：水声社 1985.
- 高橋和久「悪の誘惑とジェイムズ・ホッグ」『悪の誘惑』高橋和久訳 東京：国書刊行会 2012年 275-283
- 『エトリックの羊飼い、或いは、羊飼いのレトリック』東京：研究社 2004.

(英文学専攻 博士課程後期3年)